

【パネル報告1】

ボリビアのオキナワ集落における 多民族・多文化共生の諸相

森 幸一

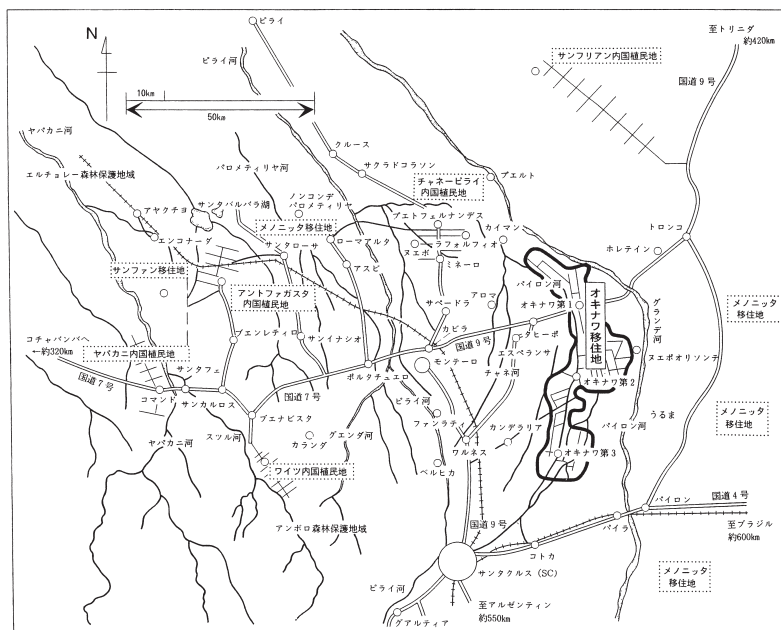
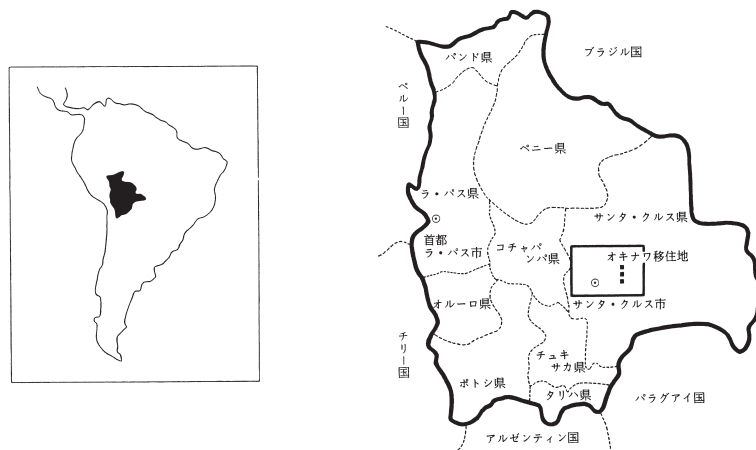
はじめに

本報告は、1956年にボリビア・サンタクルス県内に創設された第一沖縄移住地（図表1）を実質的な地域的範囲として形成された「オキナワ集落（Okinawa Uno）」¹における多民族・多文化共生の諸相を概観的に提示することを目的としている。「オキナワ集落」には現在、第一沖縄移住地へ入植した沖縄県からの戦後移住者及びその子弟、ボリビア先住民とスペイン人とのメスチッソ（Mestizo：混血）でありボリビア東部平原地帯の住民である Camba、ボリビア高地出身で国内移民である Colla という三つのグループが居住している²。報告ではまず、この三つのグループがどのようなプロセスで居住するようになったか（歴史的なプロセス）を概観し、そののちに、この三者がもつ他者イメージを記述し、最後に多民族多文化状況の諸相を①社会的側面——近隣関係、婚姻関係——、②経済的側面、③文化的側面——年中行事（聖人信仰、十字架信仰、カーニバル、入植祭、独立記念日）、教育と友人関係——、④政治的側面——自治組織と行政組織、という側面から整理する。

1 多民族状況出現のプロセス³

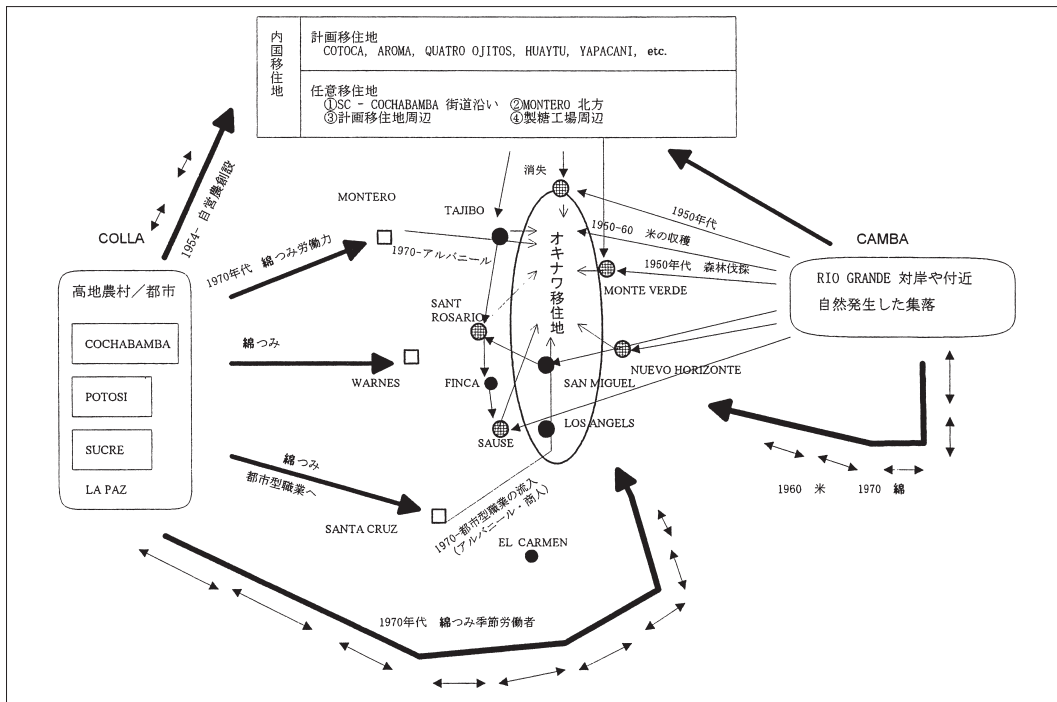
「オキナワ集落」における多民族状況出現の条件としてあるのは、ボリビア政府による東部平

図表1 沖縄移住地の位置



【出典】森幸一・大橋英寿（1996）「日系人移住地への現地労働者の流入と定着—ボリビアのオキナワ移住地の事例—」

図表2 オキナワ移住地へのボリビア人の流入—モデル図式—



【出典】 森幸一・大橋英寿 (1996) 「日系人移住地への現地労働者の流入と定着—ボリビアのオキナワ移住地の事例—」

原開発計画と米軍占領下における米国民政府と琉球政府による人口政策、経済政策の一環として立案された海外移住政策とが交差するなかで実現された（第一）沖縄移住地の建設とそこへの沖縄県からの戦後移住者の入植である。移住者は一世帯当たり 50ha の土地の無償提供を受け、森林伐採から開始される農業開発事業に従事したのである。1954 年に開始された沖縄（県）からのボリビア計画農業移民は 1954 年 400 名の移住から開始され、1984 年までに 3,371 名となっている⁴。このうちの 1959 年までの初期移住者が入植、開発したのが第一沖縄移住地である。第一沖縄移住地には 2010 年当時で 132 世帯 515 名の移民及びその子弟が居住していた。現在の世代別人口構成は一世が 145 名、二・三世が 326 名、非日系人配偶者など 31 名、その他 12 名であり、二・三世中心の構成となっている。

沖縄移住地での農業開発事業はまず森林伐採から開始され、そこに米とトウモロコシを植えつけ、開始されたが、のちには移住地からブラジルなどへの再移住者や沖縄への帰国者などの土地を吸収することで耕地の大規模化が起これ、この大規模な耕地において機械化されたモノカルチャー的な生産様式によって棉、大豆などを栽培、近年においてはモノカルチャー生産に伴うリスクを回避するために、牧畜や複合的作物栽培が導入され、現在に至っている。この開発に伴い、沖縄からの入植者は家族労働力以外にボリビア人労働力を導入したのである⁵。この一連のプロセスにおいて、多くの場合、日本人農家の労働力として吸収、定着を遂げたのが Camba⁶ と Colla と呼ばれるボリビア人であった。もちろん、この二つのグループの移動と定着のプロセスは時間的なズレが存在しているし、後発であった Colla の場合には日本人農家の労働力としてだけでなく、ボリビア人住民を対象とする小商業、大工などの職業をもつ者が移動、定着を遂げるケースも多く認められた。

Camba の移動と定着はその初期においては、近隣地域からのもので、居住に関しては日本人農家の耕地内、市街地（集落の中央を横断する国道の南側）の日本人所有地に不法侵入というかたちであり、のちには日本人リーダーの一人が自らの所有地を宅地化して分譲した、土地への居住であった。一方、Colla のほうは 1970 年代から 1980 年代初頭の棉作ブームの際に、高地から移動してきたもので、沖縄移住地

への移動者の場合、高地からの直接的移動とサンタクルス県内の地域へ移動を遂げたものが二次的移動の結果として、移動・定着を遂げるケースとがあった(図表2)。

2008年のセンサスによれば、オキナワ集落に居住する人口は4,293名で、日系人口515名(2010年当時)を差し引けば、3,700名程度大半がこれら二つのグループであったと推察することができる。また、1994年当時の資料ではCambaが約2,300名、Collaが約1,300名程度であったと推計されている。

2 三グループの他者イメージ

多民族間関係の在り方を強く規制するファクターとして、それぞれのグループが他者に対してどのような集合的イメージを析出させているかがある。オキナワ集落では、Japones、Camba、Collaは相互的にどのような集合的イメージを析出してきているのだろうか？ Cambaという用語は元来、グアラニー語で「友人」を意味するものであったが、後に農民階級(La Clase Campesina)や農場労働者(peon)を意味するようになり、現在ではボリビア東部平原地帯に広く居住する住民を包括的に示す用語となった(Stearman <1987>)。Cambaは「人種」的にはボリビアの植民者であったスペイン人と東部平原地帯の先住民Indioとの混血であるとされる。またCambaにはブラジルからの逃亡奴隷であったアフリカ系住民とのメスチソン(Mestiço:混血)による影響も認められるとされる。Cambaと類別される人々は自らをCambaと呼称することはなく、自らはCruseño(サンタクルス人)などと呼称している。Cambaはそのヨーロッパ人とのメスチザージェン(Mestiçoagem:混血性)から、自らを「文化」的にボリビアの先住民であるCollaよりも優れた存在と見る一方、ボリビアの政治権力構造においては歴史的に虐げられた存在として、政治権力を排他的に掌握してきたCollaに対して強い憎しみを抱いているとされる(Stearman <1987>)。

一方、Collaはボリビアの高地地帯(アンデス地方)に居住する、スペイン語のほかにケチャア語(Quechua)やアイマラ語(Aymara)を話す人々である。Collaと類別される人々もCamba同様に自らをCollaと呼称することはなく、出身地方に基づき、Paisano(山の人)、Cochabambino(コチャバンバ県人)、Potosiño(ポトシ県人)などと呼称する。CollaはCambaとの対照において、自らの「人種・文化的純粋性」からCambaよりも勝っている存在と認識している。

CambaとCollaが相互的に結晶させている集合的イメージをより具体的にみると、CollaはCambaに対して「怠け者(Flojos)」、「酒好き・酔っ払い(Borrachos)」、「浮気者」、「陽気」、「祭り好き」などの集合的イメージを、CambaはCollaに対して、「よく働く」、「臭い」、「貯蓄精神に富む(ケチ)」などの集合的イメージをそれぞれ結晶させている。こうした両者を巡る集合的イメージはサンタクルス市およびその周辺地域で調査を行ったStearmanが挙げているイメージと同様なものである。

それでは、日本人移住者やその子弟(以下、日系人と総称する)がもつ他者観はどのようなものであろうか⁷。日系人たちが他者に対してもつ具体的な集合的イメージは上述したColla、Cambaがそれぞれに対してもっているイメージと大きな違いはない。しかし、その一方で日系人たちは①パトロン(雇用者)としての視点、②日本文化の労働観・生活を巡る価値観などのプリズムを通じての他者観を析出させてきた。即ち、「Collaはよく働く」、「Collaは貯蓄精神に富んでいる」、「Collaはパサナック(頼母子に似た金融的互助組織)やMinka(相互労働交換)などをもって、日本人とよく似ている」、「Collaは商売がうまい」など、一方、「Cambaは土曜日に金(賃金)をもらおうと日曜に酒を飲んで月曜には仕事に来ない」、「Cambaは働くことは働くが、(賃金は)あるだけ使ってしまう」、「Cambaは信用できない」、「怠け者」などである。こうした集合的イメージを通じて、日系人は相対的に多くのCollaを雇用してきている。

また、日系人はその子弟の、ボリビア文化への同化性を巡って独自の人間の範疇化とその範疇に対し

でのイメージ付与を発達させてきている。この範疇化とは「現地人」、「ボリビア人」というものであり、前者は「文化」的経済的劣性に基づいたもので、階層的には労働者階級に、そして子弟の同化に対してはそのモデルとはなりえない人々の範疇であり⁸、後者は階層的には自らと対等かそれ以上のボリビア人であり、教育・教養もあり子弟たちの「同化⁹」のモデル・目標となりうる人々の範疇である。後者の範疇に属するボリビア人は非常に少数であり、伝統的には移住地域に居住していた数家族、現在においては教師、農業協同組合で働く技師や職員、医者などであり、前者は日系人が雇用する大多数の労働者階級ということになる。この範疇化とイメージ付与は日系人と他者との間の社会関係に強く作用している。例えば、婚姻関係は「現地人」範疇とは回避されたり¹⁰、教育を巡っては「現地人」範疇との選択的棲み分け¹¹などが行われてきたのである。

一方、Colla や Camba が日系人 (Japones という範疇になる) に対して、集合的に析出してきたイメージはボリビア人のパトロンと対比的に立ち上げられたもので、「働き者 (労働者と一緒に働く)」「面倒見がいい」「賃金をきちんと払ってくれる」「家族の面倒までみてくれる」といった、概ね肯定的なものである。しかし、その一方で、日系人は「閉鎖」的であるという否定的なイメージも集合的に析出されている。

3 多民族・多文化状況の諸相

さて、オキナワ集落に居住する三つのグループはどのような民族間関係や多文化共生の状況を発展させてきたのであろうか。ここでは社会的な側面、経済的な側面、文化的な側面そして政治的な側面から、その状況を概観することにしよう。

1) 社会的側面—近隣関係、通婚関係—

(1) 近隣関係

オキナワ集落における日系人世帯はその大半が自らの農地内に散在的に居住しているのがその特徴であり、「市街地」には非農家世帯、高齢者世帯など約 20 世帯ほどが沖縄移住地の自治組織である日ボ協会 (オキナワ日本ボリビア協会) 会館を取り巻くかたちで、特に国道沿いなし国道北側に位置する「日本人地区」に集中的に居住しているにすぎない。一方、Camba、Colla は散在的に居住する日系世帯の家事労働に従事したり、治安面の安全を守るために敷地内に居住する世帯も少数ながら存在するものの、その大多数は「市街地」の、La Cruz、Avaroa、Penoco (Los Penocos)、25 de XII という四つの地区 (Barrio) に集中的に居住している。この四つの地区の創設プロセスを簡単に示せば次のとおりであった。この四つの地区では不法侵入開始の後に宅地化され分譲された La Cruz 地区が最も古く、非日系居住者が増加したために、第一沖縄移住地の自治組織第一地域振興が所有していた土地を宅地化し分譲した 25 de XII 地区が最も新しい地区で、Avaroa、Penoco は国道の南側沿いにあった日系人所有の土地を宅地化し分譲した地区¹²であり、これらの地区は時代的には 70 年代から 80 年代初頭にかけての棉作時代に起こった大量の Colla の移動と定着、初期 Camba 定住者世帯からの分家創設や親族関係者の移動などを背景にして創設されたもので、その後、この地区が「満杯」になったために新たに創設されたのが 25 de XII 地区である。

図表 3 は Camba、Colla が集中的に居住する四つの地区の Camba、Colla 別の世帯数を示したものである。これによれば、La Cruz 地区は排他的に Camba が居住する地区であることがわかる。一方、Avaroa、Penoco 地区では相対的に Colla 世帯が多く居住、逆に La Cruz 地区と国道を挟んで反対側 (北側) の 25 de XII 地区では Camba 世帯が卓越していることがわかる。つまり、各地区では排他的ではないものの Camba/Colla 間の「緩やかな棲み分け」が存在しているのである。

この四つの地区 (Barrio) にはそれぞれ戸主会 (Junta Vicinal)、婦人会 (Clube de Madre)、青年会 (Junta

Juvenil) が組織されている。戸主会は各世帯の代表者の集まりで、選挙で選出された会長、副会長、書記を中心に1ヶ月に一度程度会合をもち、各 Barrio の行事、活動、規則、区費の金額などを決定している。また、従来では副村役場、現在では村役場 (Arcardia) からの連絡事項の伝達などの機能も果たしている。婦人会もやはり1ヶ月に一度程度参集し、ケルメッサ (慈善バザール) やダンスパーティ (Baile) の実施、これらのイベントでの飲料水や料理の販売などを行い、この収益金は地域在住の婦人が使うミシンなどの購入に充当されている。このほかに生活改善運動、料理講習会などを実施したり、各 Barrio で実施される宗教的行事の際に重要な役割を果たしている。青年会は Barrio に居住する15歳以上の未婚青年から構成され、San Juan 聖人祭などのスポーツ大会の開催や各種イベントの準備などの役割を担っている。

こうした非日系ボリビア人の近隣組織とは別に、日系人は日ボ協会会員世帯が班一組という日ボ協会下部組織としての近隣組織や年齢や性原理により青年会、婦人会、戸主会、老人会などを組織している。前者の機能として「葬式組」や連絡事項の伝達機能を有する程度であり、独自の活動を実施するようなことはない。

なお、日系、非日系それぞれの組織が交流を行うことは今まで全くなかった。また、非日系ボリビア人居住地区には公営市場、青空市が開設されているが、日系人でこれらの地区内に入り込む者は村会議員を務める日系人以外にはほとんど存在せず、それゆえ非日系ボリビア人に関する情報はほとんどもたれていないのが現状である。

図表3 地区別 Camba/Colla 別世帯数

	La Cruz	Avaroa	Penoco	25 de XII	合計
Camba	32	78	40	97	247
Colla	0	94	32	15	141
Gurayo	0	6	1	0	7
その他	1	2	0	4	7
合計	33	180	73	116	402

【出典】森幸一・大橋英寿 (1996) 「日系人移住地への現地労働者の流入と定着—ボリビアのオキナワ移住地の事例—」

(2) 通婚関係

次に、三つのグループ間の通婚状況から民族間関係を見ることにしよう。図表4は第一沖縄移住地 (オキナワ集落) に居住する日系世帯における婚姻状況を示したものである。この表から日系人の異民族婚姻は18ケース (16.1%) みられる一方¹³⁾、移住者一世 (日本) とその子弟 (二重¹⁴⁾—二、三世) との間の婚姻が83ケースと卓越していることがわかる。異民族結婚のケースではオキナワ集落内居住非日系世帯のメンバーとの婚姻はなく、非日系配偶者はいずれもサンタクルス市、モンテロ市などの出身である。

図表4 第一沖縄移住地在住完全夫婦の婚姻状況

夫 \ 妻	日本	二重	非日系ボリビア人	その他	合計
	日本	37	9	7	2
二重	6	31	9	4	50
非日系ボリビア人	1	1	—	—	2
その他	—	2	—	—	2
合計	44	46	16	6	112

図表5 Camba/Colla 間の通婚関係

	Camba	Colla	Guarayo	その他	合計
Camba	209	6	1	2	218
Colla	10	94	—	—	104
Guarayo	—	—	6	—	7
その他	2	—	—	2	4
合計	272	100	7	4	333

【出典】森幸一・大橋英寿 (1996) 「日系人移住地への現地労働者の流入と定着—ボリビアのオキナワ移住地の事例—」

このことは、日系二、三世は日ボ学校で中学課程を修了した後、集落にあるサンフランシスコ校やメトジスタ校の高校課程に進学するものは皆無で、いずれもサンタクルス市やモンテロ市などの高校に下宿ないし寄宿舎で生活しながら通学する事実と関連している。

図表5はオキナワ集落に居住する Camba、Colla 世帯の完全夫婦（夫婦とも健在の夫婦）333組の婚姻関係を示したものである。ここから看取されるのは高いグループ内婚率であり、それぞれ94%、93%が同じグループ内での婚姻である。しかし、Camba、Colla グループではオキナワ集落の居住年数も長くなり、オキナワ集落生まれの子弟もかなり多く、若者層のなかでは自分とは別のグループから配偶者を選択するものも見られるようになってきているという。

全般的にみれば、三つのグループはそれぞれ内婚的傾向が強く認められ、日系人の場合は異民族結婚の場合においても、集落内の Camba、Colla から配偶者を選定することはほとんど見られないのが現状である。

2) 経済的側面

従来、オキナワ集落に居住する Camba 住民の大多数は日本人農家の雇用労働者であった。この日本人農家への雇用労働力の卓越は棉作時代の Colla の大量移動の時期まで継続した。しかしながら、Colla の大量移動に伴い、後には商人、大工といった都市的職業に従事する Colla が移動、定着するようになった。そして、オキナワ集落の人口増加とオキナワ村役場（アルカルディア）が置かれ、メトジスタ校がオキナワ村内農村学区の拠点校となったり、様々な小売業¹⁵、運送業、タクシーなどのサービス業、宿泊業などが国道沿いに誕生するなどの状況の変化は日本人農家に経済的に依存しないボリビア人を増加させることになった。さらに、1990年代初頭から始まったスペインへの出稼ぎによって拍車がかけている。このデカセギはキリスト教系団体の斡旋によるもので、デカセギで得られた収入によって新しい住宅を建築したり、送金による生活を送るようになってきている。1980年代末頃までは大半の住宅が椰子の葉や幹で作られた「モータク小屋」という住宅であったが、現在においてこうした住宅はほとんど見られなくなっている。これらは従来日系人間に卓越してきた「日系人が富めばボリビア人も豊かになる」という言説は徐々に相対化されてきていることを意味している。

ところで、非農業部門の都市的職業が増加するに伴い、1990年代前半頃から各種の同業者組織が生まれた。例えば、1994年からバイク・タクシー業協会（Asociacion de Moto Taxi）や運送業組合（Cooperativa de Transportadores）、12月24日シンジケート（Sindicato de 24 de Desetiembre：公営市場商人の組合）、建設業者シンジケート（Sindicato de Construtores）、清涼飲料水協会（Asociacion de refresquedas）などが結成されているが、バイク・タクシー業協会、運送業協会は Camba によって、12月24日シンジケートや建設業者シンジケート、飲料水協会は Colla によってほぼ排他的に構成されており、職業的な棲み分けが存在しているといえるだろう。

3) 文化的側面—年中行事、教育、友人関係—

(1) 年中行事¹⁶—カーニバル・聖人祭・入植祭・独立記念日—

三つのグループはそれぞれの文化的伝統に基づいた様々なイベント、行事を実施するようになっていく。大多数がカトリック教徒である非日系世帯におけるキリスト教暦に基づいた行事は別にして、家庭を越えて聖人信仰や十字架信仰などに基づく行事・イベントが実施されるようになるのは1980年代初頭からのことであった。日系人の場合には、移住地創設直後より、入植祭、運動会をはじめとする各種スポーツ大会などの行事が中核的自治組織である日ボ協会主催行事として実施されてきている。また青年会にあっては沖縄の琉球國祭太鼓が盛んに行われている。

それぞれの文化伝統によるイベント・行事はエスニシティに基づいて実施されており、「棲み分け」を原則としている。しかしながら、1980年代末頃からは非日系ボリビア人の二つのグループ—Camba/ Colla—にあっては居住の近接性、教育機関における日常的な接触などを通じて、若者層を中心に Camba/ Colla を越えた Hijo de Okinawa (オキナワの子) アイデンティティが析出されてきており、友人関係などもエスニシティを越えて創設されてきているという事実も存在している。

図表 6 は非日系ボリビア人が実施している主要な行事を整理したものであるが、それぞれの行事・イベントは地区 (Barrio) とエスニシティによる組織化を原則としている¹⁷。しかし、Camba/ Colla を越えた友人関係の創設を背景に、それぞれの Fiesta への参入はエスニシティに基づく厳格な排他性は存在していない点も指摘することができる。

図表 6 Barrio とエスニシティに基づく組織化—聖人信仰と十字架信仰—

地区	聖人・十字架	開始年・日付	備考
La Cruz	La Cruz	1981年 5月2、3日	元々の住民で自営農業を営んでいたF家（現在はサンタクルス市で商業）が建立したもの。La Cruz 地区住民の願掛け。参加者は Camba 住民とその分家、親族関係者。
Avaroa	Urukupiña	1989年 8月15日	Avaroa 地区に住む Colla が勧請。小祠に安置。願掛け、ダンス（カボラールス〈女性〉・ティンコス〈男性〉）、ミサ、ケルメッサ、プロシッソン、闘鶏、娯楽（簡易遊園地・屋台など）。urukupiña の祭りの組織化は婦人会を基礎にした Padrinho/madrinha 制度。ダンスは Cochabanba 出身の Colla が始める。当初から友人関係にあった Camba も参加する。ダンスグループはオキナワ村内の Colla 集落にも招待され、ダンスを披露する。
Penoco(s)	コトッカ聖母	1993年 12月15日	地区内の Colla が勧請、聖母像は Colla 世帯で順番に安置される。祭はミサ、プロシッソン、ケルメッサなど。地区在住の Colla が参加。
25 de XII	El Carmen 聖母	1980年代後半 7月15日	地区在住の Camba と結婚した日系女性が勧請し、地区内の教会に安置。教会でのミサ、プロシッソン、ダンス、闘鶏など。地区在住の Camba が参加。

図表 7 地区 (Barrio) とエスニシティを超えた組織化—San Juan 祭、入植祭—

名称	対象	開始年・時期	備考
San Juan 祭	San Juan 聖人	1980年代 6月23日	各地区の青年会 (Junta Juvenil) とその統合組織 (Centro Juvenil) が中心となり、Avaroa と Penoco 地区の間にある運動場でダンスパーティ (Baile)、地区ごとに編成されたチームでサッカー、バスケット、バレーのスポーツ大会。Camba/ Colla の区別はない。日系人青年が参加することはない。
入植祭 Aniversario de Okinawa	なし	1980年代末 8月 Urukupiña 終了後	非日系ボリビア人の「入植祭」。この祭りのために El Comité Pro-Fiesta de Okinawa Uno が各地区の代表によって組織される。入植祭は3日間にわたって行われる。1日目—学校 (サンフランシスコ校) から教会までの松明行列と Fiesta。Fiesta は教会前の広場で屋台、簡易遊園地、バンド演奏によるダンスパーティ、各種ゲームなど。2日目—地区対抗スポーツ大会、3日目—教会でのミサ (La Santa misa) Camba/ Colla の区別はなく、両者が参加する。

Barrio とエスニシティを越えたイベント・行事として沖縄集落最大規模のものはカーニバル (Carnaval)、San Juan 祭と入植祭 (Aniversario de Okinawa) である (図表 7)。カーニバルのデイスフィーレがオキナワ集落で行われるようになったのは 1980年代後半からのことであった。カーニバルのデイスフィーレの単位は Comparsa¹⁸ と呼ばれる、踊り子と楽団から構成されるグループであるが、Comparsa の構成原理は基本的にエスニシティ、親族関係、友人関係であり、Camba、Colla が混在した Comparsa が結成されることはほとんどない。日系人がカーニバルで独自の Comparsa を結成して、ボリビア人とともにカーニバルに参加することはないが、かつて一度だけ、メトジスタ校時代に「ボリビア人」範疇の友人が

Comparsa を結成した際に、友人関係に基づいて個人的に参加したものはあったという。しかし、日系人は「現地人」範疇の結成する Comparsa に参加することは決してなかった。日系人青年の場合、カーニバルは日系人だけの Baile を揃いの Casaca を着用して日ボ協会体育館で実施するのが常である。

San Juan 祭は非日系ボリビア人地区に組織された青年会 (Junta Juvenil) とその統括的組織としての Centro Juvenil が中心となって、各地区の青年対抗のスポーツ大会やダンスパーティとして実施されるもので宗教的色彩は非常に弱い。ここでは Camba/Colla のエスニシティは発動しない。一方、1980 年代から開始された入植祭 (Aniversario de Okinawa) は Camba/Colla による、オキナワ集落在住性に基づくイベントで、日本人移民によって創設され発展してきた当該地域の開発に、自分たちも深く関与してきたことを表明するものである。この入植祭は 8 月 urukupiña 聖人祭ののちに、3 日間にわたって実施されるオキナワ集落最大規模のイベントである。入植祭は Camba/Colla というエスニシティが発動されることはなく、Hijo de Okinawa アイデンティティに基づいたものであるといえるだろう。この入植祭に日系人は参加することはなく、日系人は日ボ協会の主催行事として、第一から第三までの移住地在住者やサンタクルス市に転出した移住地出身者らが参加して 8 月に実施¹⁹、早朝に行われる慰霊祭ののちに、日系人だけによる駅伝大会 (かつては運動会) が開催されている。

オキナワ集落全体が関与して行われる最大規模の行事は 8 月 6 日の独立記念日の式典である。これは厳密にはオキナワ村の行事であるが、当日は村長、村議員はじめ村役場関係者、警察派出所の警官、日ボ協会会長などが正装で参列し、独立記念日を祝うパレードが行われる。パレードにはオキナワ集落にある日ボ校、サンフランシスコ校、メトジスタ校の児童・生徒がそれぞれの学校から会場のカトリック教会前の広場まで、ブラスバンド演奏に合わせてパレードする。広場に集合すると、日系児童・生徒を除く二校の児童・生徒や村長を初めとする地域の権力者²⁰や参集したボリビア人たちはカトリック教会へ入り、独立記念日のミサを行う。ミサ終了後には当該地域の権力者、各種団体・組織の代表者などが、日ボ校ブラスバンドの演奏に合わせて行進、国旗、県旗、ボリバル将軍の肖像が飾られた式台の前ではそれぞれに敬意をこめて一礼、所定の場所に整列して式典が開始される。この式典に参加する日系人は日ボ協会会長と日ボ校児童・生徒だけであり、日ボ協会の青年会、婦人会、あるいは様々な日系団体は全く参加しない。

(2) 教育²¹と友人関係

沖縄移住地創設当初より、移住者は子弟のための教育機関を設立し、二言語二教育を実施してきた。その変遷は、①分散初等教育＝組合校時代 (1956～1962)、②キリスト教系宗教団体運営の公立校時代 (1960 年代初頭～1980 年代後半)、③私立日ボ校時代 (1987 年～現在) と整理することができる。ここではこの変遷プロセスを詳細に記述することはできないが、本報告との関連でいえば、子弟教育を巡って問題が生じたのはキリスト教系宗教団体運営の公立校時代であり、非日系ボリビア人の大量の移動と定着の結果、それまで日系児童・生徒が卓越していたメトジスタ校の教育環境が 1970 年代末の時点で、日系・非日系が均衡、1980 年代当初より非日系児童・生徒が 7～8 割を占めるようになり、教室内で児童／生徒同士の喧嘩や盗難などが発生、さらに教育レベルの低下が生じたのであった²²。このことは日系父兄にあっては「現地人」子弟との共学の結果として解釈され、新たな日系子弟を中心とする学校建設の必要性が叫ばれ、1987 年には私立校として小中学課程をもち、二言語二文化教育機関としての日ボ学校が設立されたのである。この日ボ校は非日系児童・生徒を完全に排除するものではなく、私立校としての月謝を支払う経済的条件のあるボリビア人子弟も受け入れた²³。日ボ校における非日系児童・生徒の父兄はメトジスタ校やサンフランシスコ校の教員、オキナワ診療所の医者、CAICO の技術者や職員など、所謂「ボリビア人」という範疇に類別されるひとたちであった。つまり、一方において「現地人」と類別されるグループに属する児童との共学は回避され、他方において「ボリビア人」と類別される世

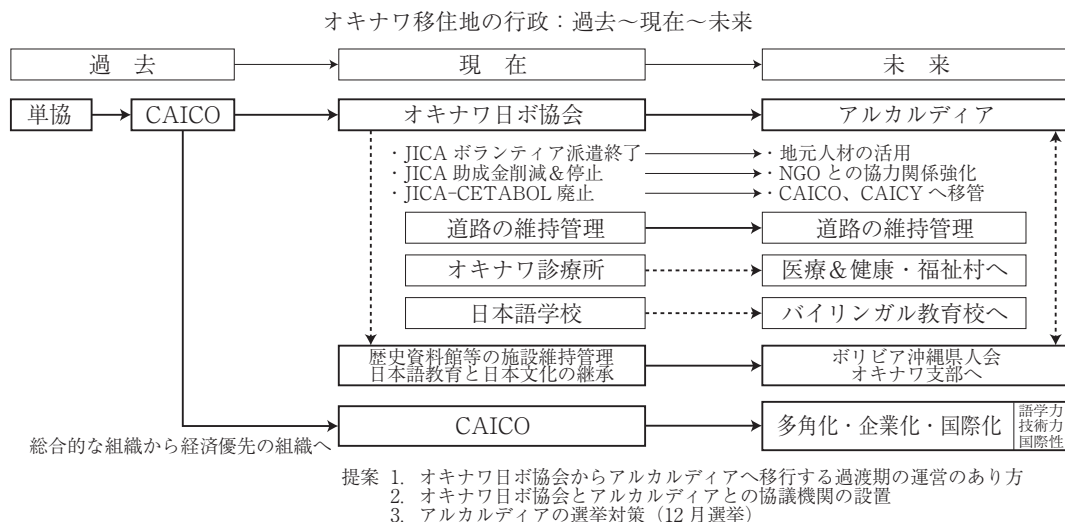
帯の児童との共学は許容されたのであった。このことは日系児童の友人関係にも反映するものであり、日系子弟が「現地人」子弟と友人関係をもつことはほとんどないのである。

Camba/Colla という視点からみると、傾向性としては、前者はメトジスタ校、後者はサンフランシスコ校へ通学するという志向性が認められるようである。

4) 政治的側面—自治組織と行政組織—

オキナワ集落には日ボ協会（オキナワ日本ボリビア協会）、第一地域振興会という二つの移住地行政組織とオキナワ村役場（アルカルディア）という二つの「行政」組織が存在している。日ボ協会は第一から第三までの沖縄移住地居住者をその会員として、移住地での生活全般に関する「行政」的業務を遂行している。それは各種行事を通じた日系人の親睦から、道路管理、学校・診療所の運営、健康保険組合の運営、郵便、戸籍業務の代行、NHK 海外放送の会員世帯への視聴サービスなどまで多種多様である。協会は原則的にはいくつかの基準に基づいて「公平」に徴収される会費によって運営されるが、従来そして現在においても JICA（国際協力機構）からの助成金が大きなウエイトを占めてきた。日ボ協会が第一から第三までの移住地行政に関与するのに対して、第一地域振興会は第一移住地居住者を会員とする自治行政機関であり、会費により第一移住地の環境整備や各種イベントなどを実施している。

図表 8 オキナワ移住地行政の未来図（モデル）（2011）



また、振興会は独自の財産や会館などの施設を有しており、その一部（土地）は非日系ボリビア人世帯の増加に対応するために宅地化し分譲されている（25 de XII 地区）。

一方、1998年に、ワルネス郡の Segunda Seccion Municipal として誕生した「オキナワ村」の村役場はオキナワ集落をはじめとする近隣 21 集落への行政的サービスを提供している。アルカルディアは「オキナワ村」の中心であるオキナワ集落に置かれ、選挙で選出される村長、5名の村会議員、数名の職員などから構成されている。この村会議員のうち2名は日系二世議員²⁴であり、行政職員の長も日系一世（子ども移民）が務めている。これら日系人の存在は二つの「行政」組織—アルカルディアと日ボ協会との橋渡し＝調整役であることが期待されている。この「橋渡し」とは従来、日ボ協会が行ってきた道路やリオグランデ河の堤防の維持管理、医療、教育を将来的にアルカルディアに引き継がせることにおいて、日系人にとって日ボ協会が提供してきた水準を維持しながら、日ボ協会＝日系人とアルカルディア＝ボリビア人側との利害を調整することにある。

図表8は日ボ協会が作成した移住地行政の現在及び将来的な構想を描いたモデル図である²⁵。日ボ協会の多様な役割の中で最も重要なのは生産と生活にとっての必須条件である道路の維持・管理、医療²⁶（オキナワ診療所の管理運営、健康保険組合²⁷の管理運営など）、そして児童教育（日ボ校の運営）である。従来、移住地の運営は入植者（居住者）たちからの会費やJICAからの様々なかたちでの助成金で行われてきた。これまで会員会費やJICA助成金（さらには余剰金をプールした積立金など）をうまく活用しながら、これらの業務は遂行されてきたのであるが、現在においては会員世帯の高齢化や転出、移住地内での分家可能性がほとんど存在しないこと、JICA助成金の削減やカット、日本への就労者の日本定住に伴う会費未払い、世帯経済負担の過重化（日ボ協会会費、健康保険掛け金、教育関連費など）などによって、これらの業務の遂行・維持が困難になりつつある。移住地の自治組織が担ってきたこれらの行政サービスは本来、行政組織であるアルカルディアが提供すべきものである。1998年に行政村「オキナワ村」が誕生して以来、これらのサービスを自治組織からアルカルディアにどのようなかたちで移行させていくかが日ボ協会内で議論、検討されてきたのである。

しかしながら、これらの移行はなかなかスムーズには運んでいないのが現状である。例えば、入学者数が減少し続ける日ボ学校の運営は高額な月謝を支払う父兄はもちろん、資金的に援助している日ボ協会や第一地域振興にとっても大きな経済的負担になっており、将来的に日ボ学校をどうするかという議論が行われている。この議論では、ボリビア公教育をサンフランシスコ校ないしメトジスタ校に任せ、日本語教育は「私塾」というかたちの日本語学校で教えるというものや私立校としての二言語二文化教育体制は維持、児童・生徒の獲得は他の学校との差異化（例えばボリビア公教育のレベルの高さなど）を通じて行うというものなどの意見が出されている。しかし、いずれもこれまで回避してきた「現地人」子弟との共学へとつながっており、子弟教育の方向性は明確にはなっていないのである。また、道路の管理・維持にしても、ボリビア人側には経済的に余裕のある日系人が行うべきであるという意見や移住地内の道路は日系人の責任において実施し、移住地外の道路の整備はアルカルディアが担当する²⁸といった意見などが錯綜している。さらに医療分野では、オキナワ診療所とMini Hospital、そして現在建設中の公立病院との関係はどのようにするか、日系人の医療を支えてきた健康保険制度はどのようなのか、医療水準は公立病院となったときに現在のオキナワ診療所のレベルを維持できるのか、などの問題が存在しているのである。

しかし、こうした「行政」的サービスが村役場に移行できない背景には、日系人たちがもつ「現地人」というヒト範疇と「現地人は信用できない」といった、それへの否定的なイメージの付与、「移住地」への思い入れはあるものの、ボリビア人とともに目指す「地域社会」の発展という考え方が一部リーダー以外には不在であるといった事実があるといえるだろう。

おわりに

これまで、いくつかの側面からオキナワ集落の多民族・多文化状況を概観してきたが、その特徴は「(選択的) 棲み分け」であり、とりわけ日系人と「現地人」と類別される大多数の非日系ボリビア人の間においてはほとんど「交流」が存在していないという点である。

こうした状況はこれまで沖縄移住地として発展を遂げてきた当時から、地域行政社会へと展開をとげ、さらなる発展を目指すに際して、大きなマイナス要因となると思われる。これまで日系人と非日系ボリビア人との間で相互交流の試みが企画されてこなかったわけではなかった。例えば、かつて、メトジスタ校での日系及び非日系ボリビア人が共学するようになった当時、背反・対立する関係を打開しようとした校長の、日系・非日系が共に参加するサッカーリーグの立ち上げ、近年においては二つの自治組織の婦人会や青年会同士の交流、あるいはカトリック教会前の広場における「民族芸能祭」の実施な

どが企画として持ち上がったたりもした。しかし、これらは長続きしないか、実現されるには至らなかったものであった。

既に「移住地（日系人）の発展が地域社会の発展につながる」という認識は現実的なものではない。むしろ、日系人はオキナワ集落という一つの地域社会の一構成要素であり、地域社会の発展には Camba や Colla といった構成要素との協力と連帯が必要であり、そのためにはまず相互的な理解が必要であるという認識、そしてその上でどのような役割分担が可能なかが議論されていかねばならないだろう。Camba や Colla といった人々はもはや日系人農家の単なる労働力ではないし、かつてのような「現地人」ではないのである。これらの子弟の多くは移住地生まれの二世同様に、オキナワ集落で誕生し、ここで教育を受け、ここを「故郷」とする Hijo de Okinawa（オキナワの子）たちなのである。こうした認識にたち、相互的な「交流」を行い、自らのもつ文化的伝統を維持しながら、「オキナワ集落」の発展にどのように寄与できるのかが模索されていかねばならないだろう。

註

- 1——行政単位としての「オキナワ村（Okinawa Uno）」の地域的範囲は Okinawa Uno 集落を中心とした近隣 20 数集落を包含するものである。この 20 数集落から構成される行政単位を「オキナワ村」、その行政的中心である Okinawa Uno を「オキナワ集落」と仮に呼称する。
- 2——オキナワ集落には少数ながら Guarayo と呼ばれる、文明化したグアラニー族の世帯やボリビア人と結婚したブラジル人、チリ人、アルゼンチン人なども居住している。
- 3——本節及び相互的イメージに関する詳細な記述は森幸一・大橋英寿「日系人移住地への現地労働者の流入と定着」『日本文化研究所研究報告別巻』第 33 集（通巻 37 集）55-88 頁、東北大学日本文化研究所 1996 年、参照のこと。
- 4——ボリビア農業計画移民は 1954 年に開始されたが、最初の入植地では地方伝染病の発生によって入植地を放棄、移動した先（パロメーティア）では地主との土地問題、土地の狭さなどがあり、1956 年に現在の第一沖繩移住地へと移転した。しかし、沖繩移住地への定着率は低く 10% 未満であり、多くはブラジル・サンパウロ、アルゼンチン・ブエノスアイレス、ペルーなどへ再移住したり、沖繩へ帰国したりしている。
- 5——第一移住地と異なり、第二、第三移住地では移住地中心地区（将来の市街地予定地）へのボリビア人の定住を拒否した。そのため、第二、第三移住地では日系農家の敷地内に住んで家事労働及び警備を行っているボリビア人世帯だけが集落内に居住しているにすぎない。
- 6——Camba と日本人移民との接触は移住地創設直後から、森林伐採、陸稲・トウモロコシを中心とする初期農業の雇用労働力として開始されて、Camba は日本人の順応に対して大きな貢献をなしてきた。
- 7——日本人移住者およびその児童たちは Colla、Camba という範疇に類別される人々を識別するのに困難性はなかった。それはそれぞれの身体的特徴（Fisionomia）や衣服、装飾品などを通じて行われた。例えば、Colla は Pollera（女性の場合）というプリーツが多い重ね着のスカートと山高帽、編んで後ろに垂らした髪型、寒い日に身に着ける Poncho や Chulo（耳覆い付の毛糸の帽子）などを通じてなされた。
- 8——この「現地人」という範疇化と意味付与はブラジルに渡った日本人移民が「カボクロ（ブラジル文化のコンテキストでは自給自足的農民、田舎者などの意味）」という範疇に対する意味付与と非常に類似したものである。
- 9——もちろん、この「同化」は「ニホンジン」としての文化的特性を保有したうえでのもので、「ニホンジン」らしさを喪失する全面的な同化を意味するものではない。
- 10——「現地人」範疇に類別されるボリビア人との婚姻は特に日系女性が「現地人」男性と結婚した場合には、中核的自治組織である日ボ協会のメンバーシップを喪失したり、日系家族との交際が切断されたりした。その一方で、「ボリビア人」範疇との婚姻はこうしたことは生じない。
- 11——このことは日ボ学校設立の主要な要因であった。
- 12——Avaroa、Penoco 地区にはサッカー場を中心とする運動施設（Cancha）、医療診療所、村立市場（mercado Municipal）などの公共施設が存在する。また Avaroa 地区の市場付近には週一回、青空市が開設されている。さらに、Avaroa 地区には urukupiña 聖母を祀る小祠、25 de XII 地区には El Carmen 聖人を祀る教会、La Cruz 地区には二つの十字架がそれぞれ建設されている。
- 13——日本人移住者一世が非日系ボリビア人女性と結婚するケースは 9 例と多いが、これは移住が「家族」形態で、移住者の中には多くの「子供移民」が存在していたことと関連している。
- 14——「二重」は「日系二重国籍者」のことである。沖繩移住地の日本人移住者の生活戦術の一つとして二重国籍取得戦術と呼びうるものがあり、当地で誕生した二、三世も日ボ協会を通じて日本国籍取得手続きを取ることが行われているためである。
- 15——日系人商店は日系人のみならず、非日系ボリビア人を顧客とするが、この逆はほとんどない。
- 16——森幸一「第 4 章 オキナワ移住地のボリビア人の組

織化とアイデンティティー特にフィエスタを中心として」大橋英寿編著『南米ボリビアのオキナワ村—移民の社会心理学的研究—』仙台、1998年。65頁～99頁を参照している。

- 17—エスニシティと友人関係に基づいて組織されるものに、カーニバルのComparsaがある。Comparsaは楽団を契約し、オキナワ集落内の街路を、ダンスをしながら練り歩くとともにPadrinho/madrinhaの屋敷地などでダンスを披露する（ディスフィーレと呼ばれる）グループである。このComparsaがオキナワ集落在住の青年たちによって組織されるようになったのは1980年代後半のことであった。
- 18—Comparsaは結成されると3年間は継続しないといけないという原則がある。Comparsaの内部組織としては会長、副会長、書記、連絡係がある。Comparsaに入ると一定金額の会費を納める。この会費はCasacaと呼ばれるユニフォーム代や楽団との契約料、Caro Alegorico（飾り付けられた自動車）の飾りつけの材料費、練習の際の飲食費、Corzo（コンクール）への参加費などに充当される。また、それぞれのComparsaではPadrinho/Madrinhaを依頼し、カーニバル期間中の料理や飲料水などの提供を受ける。その代わりにComparsaはPadrinho/Madrinhaの住宅敷地内でダンスを披露する。これらPadrinho/Madrinhaの選定は集落内にとどまらず、近隣村落まで及ぶものである。
- 19—8月というのは現在の沖縄移住地への入植月ではなく、最初の入植地—うるま植民地—へ第一次移民が入植した月である。8月の入植祭における慰霊祭は第1移住地の共同墓地（納棺・納骨堂）で日ボ協会会長始め役員、第1から第3までの移住地の代表、日本国領事、CAICO（農業協同組合）代表などが参加し、メトジスタ教会の司祭（と助手）の手で、可能な限り宗教色を抑えたかたちの式として実施されている。
- 20—日ボ協会会長はミサには参加しない。
- 21—第一沖縄移住地の日系子弟教育の歴史に関しては森幸一「第5章 第1沖縄移住地における教育と学校の歴史的展開」『南米ボリビアのオキナワ村—移民の社会心理学的研究—』仙台、東北大学文学部心理学研究室1998年101-127頁を参照のこと。
- 22—これには別の要因も存在している。それはボリビア経済の逼迫による教師への給与支払いの遅れや環境の整備などを要求して行われた教員ストにより、公立校での授業が正常な形で行われないという状況が続いたことである。また、『若槻報告』（1984年）と呼ばれる日・ボ児童・生徒の学力比較調査において日系生徒の学力が非日系生徒に比較して劣っているという結果もまた、日系父

兄にとっては驚きであり、私立校新設の議論が行われるようになったのである。

- 23—1996年度の日ボ校非日系在学学生33名の父兄の職業は農業・牧畜業7名、農協・組合職員5名、商業4名、教師2名、医師1名、日系人と結婚した者の連れ子1名であり、農業・牧畜業の場合にはA、C、P、Sという大規模な自営農業・牧畜業を行うFamiliaに帰属するものであった。ちなみに、1998年度は総生徒数94名で日系生徒61名（64.9%）、非日系生徒33名（35.1%）という内訳であった。
- 24—日ボ協会側の利害を背負った存在であることが期待されているものの、日系票だけで選挙に当選することは不可能であるため、ボリビア人票を獲得するために、日ボ協会側の意向は相対化されてしまっているのが現実である。
- 25—この図に「提案」として掲げられている協議機関の設置はまだ実現されていない。また、日ボ協会からアルカルディアへの移行の過渡期の運営に関しては、道路整備管理において、移住地内の道路に関しては日ボ協会が、そのほかの道路に関してはアルカルディアが担当するというかたちでの運営がなされている。
- 26—オキナワ集落内にはオキナワ診療所とともに、サンタクルス県の公的な診療機関であるMicro Hospitalが存在している。ここには医師・正看護婦1名、看護助手2名、技術スタッフ2名、職員3名がスタッフとして働いている。この病院の一日の診察者数は20～25名で全員ボリビア人である。日系人がこの病院を利用することはない。
- 27—沖縄移住地の独自の健康保険制度は1989年に日ボ協会会員を対象に発足したもので、1990年代末の時点で会員の約8割が加入者であった。この制度はオキナワ診療所を利用する移住地内の日系人加入者に対して、診療費の4割を給付する制度で、診療所運営面の安定化と日系人利用者の負担減を図ったものである。この診療所は移住地入植者の医療施設として開設されたが、1990年代末の時点で、オキナワ診療所の利用者の94%が非日系ボリビア人であり、86%が移住地外からの来所者であった。
- 28—しかし、アルカルディアが道路の管理維持を行うようになった場合、近隣21集落の道路を管理維持しなければならず、移住地内の道路管理維持が優先的に実施されるわけではなく、日系農家の利害に資するものではなく、などの懸念も表明されている。こうした分野にエスニシティを条件とする資源の配分の問題が将来的に出てくる可能性がある。

参考文献

- Stearman, A.M., *CAMBA Y COLLA: MIGRACION Y DESARROLLO EN SANTA CRUZ, BOLIVIA*. La Paz, 1987.
- 森幸一・大橋英寿「日系人移住地への現地労働者の流入と定着—ボリビアのオキナワ移住地の事例—」『日本文化研究所 研究報告別巻』第33集（通巻第37集）55-88、東北大学日本文化研究所、1996年。
- 大橋英寿編著『南米ボリビアのオキナワ村—移民の社会心理学的研究—』東北大学文学部心理学研究室、1998年。